

聖書：マタイ 4：8～11

説教題：主にだけ仕えよ

日時：2016年10月16日（朝拝）

荒野における悪魔の誘惑の第3回目です。まずこの出来事が聖書全体の中で持っている意義を確認しておきたいと思います。私たちはこの記事をどういう視点で読むべきでしょうか。それは聖書の創世記のエデンの園におけるアダムとエバに対する悪魔の誘惑との対で見るということです。創世記3章で全人類の祖として、その後の全人類に決定的な影響を持つアダムが悪魔と戦いました。彼はそこで悪魔の誘惑に屈してしまい、それによって彼に続く全人類を罪と悲惨の状態に引き入れてしまいました。それ以来、全人類はサタンの支配下にある者となってしまいました。しかし神は創世記3章15節の「原始福音」において、やがて「女の子孫」と呼ばれる救い主が現れて、サタンに勝利すると言われました。その約束に従って、神が送ってくださったのがこのイエス・キリストでした。ですからその方はまず悪魔との戦いへと進んで行きました。この方は先の第一のアダムの失敗を取り返し、人類に祝福を取り戻すお方、言わば第2のアダムです。ここでサタンに打ち勝つなら、この女の子孫は人類に新しい始まりを与えることができます。一方のサタンは、新しくやって来たアダムを、また転ばせて見せよう！と近づいて来ます。実にここはそういう戦いの箇所なのです。すでにキリストは一つ目と二つ目の誘惑を退けました。今日はその三つ目を見て行くこととなります。以下、サタンの誘惑、キリストの対応、私たちへの適用の3つのポイントで見て行きたいと思います。

まず第一にサタンの誘惑について見て行きます。8節に「今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せた」とあります。果たしてこれは現実に行なわれたことだったのでしょくか。イエス様が連れて行かれた山とはどこだったのでしょくか。世界の中で一番高い山はエベレストで8,848メートルあると言われます。しかしそこに上ったとしても、この世のすべての国々と栄華を見渡すことができるわけではありません。地球は丸いわけですから、文字通り世界全体を見られる山など存在しません。ですからこれはそのような幻を見せたと取るのが適切だと思われる。実際、荒野にいたイエス様を、その体ごと、悪魔が高い山に連れて行くと見る方が不自然でしょう。しかしだからと言って、この誘惑がリアルでないということにはなりません。本当の誘惑はまず心の中で起こります。悪魔はイエス様の心に、この誘惑をもって働きかけたと考えられます。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全

部あなたに差し上げましょう。」　まず解決しておきたい問題は悪魔にこのような権威はあるのかということです。聖書から分かることは、この世界の究極的な支配者は神であるということです。神が支配していない空間や領域はない。一方で聖書はサタンを「この世を支配する者」とか「この世の神」とか「全世界は悪者の支配下にある」と言っています。先ほど見たように、人間は神よりも悪魔を信じ、悪魔と手を組んだことによって、この世界もろともに悪魔の支配下にあるようになってしまいました。そしてそこから抜け出せないでいるところに、私たちとこの世界の悲惨があります。ですからある意味でこのサタンの主張は正しいのです。彼がこのように言うことはできるのです。

では今回の悪魔の誘惑の本質は何だったのでしょうか。それはこういうことだと思われまます。イエス様は今、父なる神の御心に従って人となって地上に来られ、十字架へと向かう道を歩み始めています。この道を最後まで進んでこそ、信じる人々を救い出すことができます。その栄光の状態に達するためにはまず十字架という道を通って行かなくてはなりません。そんなイエス様に対して悪魔は、そんな時間と労力のかかる遠回りの道ではなく、もっと手っ取り早く、今すぐ栄光を手に入れられる道を進んで来なさいと誘惑したのです。私を拝むだけでOK。非常に簡単に単純なこと。そうすれば苦しい歩みを全部省略することができる。すぐゴールに達することができる。だから苦しみなどパスして、楽に栄光を手に入れられるこの道を進んで来なさい！と誘惑したのです。

これはエデンの園におけるアダムに対する誘惑を思い起こさせます。最初の人間アダムは、罪のない素晴らしい状態に造られましたが、しかし最初から最終的な栄光の状態に造られたのではなく、神を知り、神に信頼し、神に従う歩みを経て、最後の完全な状態に達するようにと召されました。しかし悪魔はそうではない道を提案したのです。神に従う道ではなく、神が禁じた善悪の知識の木から取って食べる道を提案したのです。そうすればあなたは神になれる！何も面倒なプロセスを踏まなくても良い。うるさいことを言う神に従う必要なんかない。私の言うとおりに、これを手に取って食べさえすれば、一瞬で栄光に達することができる。神が定めたいくつもの段階をショートカットできる！しかしその提案に従った結果はどうだったでしょうか。アダムとエバは禁じられた実を食べた瞬間、愕然としました。神になったどころか、神から離れた自分たちの貧しさとみじめさに愕然として、自分を隠し始めました。サタンが語ったことは偽りだったのです。そして人間は墮落の状態に落ちました。まさにそれと同じことを悪魔はここで提案しています。苦難を経て栄光に達するという道ではなく、私をちょっと拝むこと

によって、今すぐに栄光に入れ！面倒なことはパスして一気に栄光を手に入れてしまえ！と。

これに対してイエス様はどのように対応されたでしょうか。第2にそのことを見て行きたいと思います。まず私たちが見るのは、イエス様は今回もみことばをもって戦われたということです。3回ともそうでした。そして大事なことは御言葉を正確に引用されたということです。これが非常に重要なことです。創世記3章でエバもそれなりに神の言葉を引用しましたが、ご存知の通り、彼女の引用は不正確でした。神が言っていないことを付け加え、また神がはっきり語っている言葉を薄めてしまいました。そこから転んでしまいました。ですから御言葉は何となく覚えていれば良いのではないのです。大体覚えていれば良いのではないのです。正確に引用しなくてはダメなのです。そこに私たちがどれくらい、神に忠実かが試されるのです。

さてイエス様がここで引用された御言葉は申命記6章12節でした。そのもともとの箇所を開いて確認したいと思います。ここはイスラエルがこれから約束の地カナンに入っていくとしていた際に語られたものです。イスラエルはその約束の地に入った時、10節からのところに書いてありますように、「あなたが建てなかった、大きくて、すばらしい町々、あなたが満たさなかった、すべての良いものが満ちた家々、あなたが掘らなかった掘り井戸、あなたが植えなかったぶどう畑とオリーブ畑」といったものを所有するようになります。それらから取って食べ、満ち足りるようになります。イスラエルはそれまで荒野を旅して歩いた民であり、カナンに入った時には、その地の発達した文化・文明に驚嘆し、引き付けられるようになる。まさに「この世の栄華」を見せられるわけです。しかしだからと言って、心が神から離れてはならない。12節～13節：「あなたは気をつけて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出された主を忘れないようにしなさい。あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない。」 イエス様は今日の箇所ですまさに、かつてのイスラエルのように目の前にこの世の国々とその栄華とを見せられました。しかしそれらに心を奪われて、何よりも大切な第一原則を譲ってしまってはならない。神に従う歩みを犠牲にして何らかの祝福を手にしてはならない。人間にとっての根本原則は「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ」である。イエス様はそのみことばをもって悪魔の誘惑を退け、わたしはただ神に従い、神が下さる祝福のみを受け取るのだと答えたのです。

この世の祝福とは言え、そのようなものを目の前にぶら下げられると、それらに対する思いを断ち切ることに私たちは困難を感じるものです。しかしイエス様がこの誘惑を退けることができたことには秘訣がありました。ヘブル書 12 章 2 節：「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」ここに「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに」とあります。イエス様は一方ではサタンの誘惑に心惹かれながらも、一方で「わたしは神に従う者だから」と言って、ため息をつきながら、サタンが差し出したものを拒んだのではなかった。イエス様は神に従う道の最後に、この上もなく素晴らしい栄光・勝利・祝福があることをしっかり見ていたのです。そのご自分の前に置かれた喜びのゆえに、手前にある十字架の道をものともせずに進んで行かれたのです。その行く手にある大きな喜びを見ている限り、サタンが提供するこの世の栄華など取るに足りない。それは安っぽい栄光でしかない。まだまだこれから苦難の道を歩かなければならないとは言え、その後に備えられているとてつもない栄光から目を離さず、それを喜び見つめていたので、イエス様は神に従う道を選び取られたのです。

最後に今日の箇所からの私たちへの適用について考えてみたいと思います。2 つのことがあるかと思えます。まず一つは、今日の箇所を読む大切な視点は、先に触れたように、これは人類の新しいかしらである方の戦いであるということです。人類に新しい始まりを与え得る私たちにとって救いの望みなる方の戦いです。その方がここで悪魔に負けなかった。11 節にある通り、悪魔はイエス様を離れて行った！もちろんこれからも悪魔は繰り返し攻撃して来るでしょう。しかしここに人類の歴史で初めて悪魔に勝った人が現れたのです。人類の歴史に新しい 1 ページが刻まれたのです。これはボクシングに例えれば、まだ第 1 ラウンドが終わったばかりに過ぎませんが、初めて人間が勝利を収めたのです。これから何ラウンドも悪魔との戦いが続くとは言え、この方に連なるところに私たち人間の救いは与えられます。この方は十字架の死に至るまで父なる神の御心に服従し、その道を最後まで進んで、私たちに救いをもたらしてください。私たちはその救い主の第一ラウンドの勝利を見て歓喜に沸きつつ、この神がくださった救い主につながって自らの救いをいただくべきなのです。

もう一つのことは、私たちはこの方に連なって自らも悪魔との戦いを戦って行かなけ

ればならないということです。「苦難を経て栄光に入る」というコースは、イエス様だけの道ではなく、イエス様に従う者たちのコースでもあると聖書に示されています。イエス様は「わたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしに付いて来なさい」と言われました。確かにその道は主がすでに先に歩いてくださった道であり、私たちが負うべき重荷のほとんどを担ってくださった道ですから、私たちに残されているのはずっと荷が軽くされた道です。しかしそれでもそれは苦しみの道、十字架を背負う道とされています。あるいはイエス様は「狭い門から入りなさい。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」と言われました。私たちが歩く信仰の道は狭い道であり、でこぼこ道であり、歩きにくい道です。神への信仰を持ったならば色の世界が待っているかと思うのですが、そうはうまく行きません。色々難しいことも起こって来ます。そういう中で自分が思い描いていたようには行かず、意気消沈していると、サタンがやって来て「この栄光の道はどうかね」と誘惑するのです。こっちにはもっと手っ取り早く祝福を手に入れられる道がある。これはまたとないチャンスである。信仰の道を、などと言っていると、このチャンスは逃げて行く。あなたは大体は神に従っているのだから、これくらいのことはいいだろう。これを手にして、また信仰に戻ればいいのだから、と。そうして私たちが偽りの道へ引き込まうとするのです。私たちはまさにその時、このイエス様にならって、「引き下られ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。」と言わなければならないのでしょうか。いかに私たちの目の前にぶら下げられる栄光が魅力的なものに見えても、それが神がくださるものでなくては偽りです。私たちはサタンから祝福を受けてはダメなのです。むしろ神が定めているコースは「苦難を通して栄光へ」というコースです。ですから今、苦難の中にあっても、それを恥じる必要は少しもありません。その苦しみの後に栄光が来るのです。ローマ書5章3～5節に「患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」とありますように、この苦難が用いられてやがての栄光が私にもたらされるのです。この神の祝福コースから外れてはならないのです。

11節最後の言葉は、私たちにとって慰めではないのでしょうか。悪魔は離れて行き、「見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた」とあります。サタンは第二の誘惑において、神の御使いが本当にあなたを守るかどうか、高い所から飛び降りて試してみたら、とけしかけましたが、その必要はないのです。御使いはきちんと守ってくれています。また悪魔は第一の誘惑において、神はあなたの必要を満たしてくださらないようだから自分の

力で石をパンに変えたら、とけしかけましたが、御使いたちがここで必要な糧を運んで来たと考えられます。ここの「仕えた」という言葉は「食卓に仕える」という意味の言葉だからです。神はご自身に信頼する者を、このようにご自身の時と方法に従って守ってくださるのです。ですから私たちは地上の生活を送る上でも、この神の配慮を信じて心一つにして神に従って行けばいいのです。

イエス様は今日の箇所です。「主にだけ仕えよ」と言って、悪魔を追い払いました。「主にだけ」とすると、選択の幅が狭まり、厳しい道を進むことのように感じるかも知れません。しかし私たちは「この方にだけ私は信頼する」と心定めれば、安心なのです。自分の知恵や力で色々考えて行動しても、いつの間にかサタンによって偽りの道へ導かれるだけです。本当に良きものはただ神から来ます。その神が下さる良いものだけを私は受け取ると心決めればいい。私たちも「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ」という道に進みたいと思います。そしてその道を行く者の上にある神の守りを深く味わい、神が定めておられる最後の真の栄光へと導かれる歩みへ進みたいと思います。